

二〇一五年度 一般三月入学試験

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は29ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

その男は駅の待合室に

(1)

座っていた。

特急や急行はもちろん、鈍行でさえ一時間に一本ほどしか通らない山間やまあいの小さな駅だった。無人駅ではなかったが、そのとき駅員の姿はなく、ストーブの炎の熱だけが待合室にこもっていた。

(2) 寒風から逃れるように待合室に駆け込んだ僕を、その男はちらつと見つめ、またストーブの炎に視線を戻した。

まるで他人の部屋に、間違えて入ってしまったような気持ちにして、わざと無関心を装い、壁に貼られた時刻表を見に行った。男は裾の長いコートを着て、高そうな革靴を履いていた。服装がそう思わせるのか、一見して地元の人でないことは分かった。その日、母親に頼まれて、この駅の近くに暮らす叔父の家へ何か荷物を届けた帰りだった。酒だったか、みかんだったか、とにかく届けに行くのを最後まで面倒臭がっていた記憶だけはある。

次の上り電車まで、まだ二十分以上あった。

ベンチは一つ空いていたのだが、そこへ座ればじつと炎を見つめるその男とストーブを挟み、向かい合うことになる。かと言って、その人の隣に座るわけにもいかず、狭い待合室には時刻表の前以外に立つ場所もない。

仕方なく、寒いホームへ出ることにした。サッシのドアを開けると、ホームを駆け抜けてきた寒風が、一瞬にして待合室の空気をからめとる。

慌ててドアを閉め、薄暗いホームに出た。吹きつけてくる寒風に背を向けると、どこまでも冷えた線路が伸びていた。氷のように冷たいホームのベンチに、五分ほどがマンして座<sup>(3)</sup>っていたが、学生服の上にコートも羽織らず出てきたせいで、手

足感覚がなくなりそうだった。たまらず待合室へ引き返すと、その人はまだじつと突を見つめていた。

ストーブを挟んだ前のベンチに座り、凍えた両手を擦り合わせていると、「高校生？」と、その男が訊いてきた。

「……あ、はい」

「この辺に住んでるの？」

「いえ、家は市内ですけど、この近くに親戚の家があるんで……」

男は「そう」と短く応え、また炎へ視線を戻した。

短い会話だったが、狭い待合室の妙な緊張感だけはとけた。

「この辺の方ですか？」

違うとは分かっていたが、声をかけてくれた礼のつもりで訊いてみると、男が小さく首をふる。

「……飛行機に乗るのが好きでさ」

短い(4)チンモクのあと、男はそう呟いた。一瞬、話の繋(つな)がり(5)が分からず、「え？」と首を傾げると「……たまにふらつと飛行機

に乗って旅行するんだよ」と答える。

「飛行機？」

「そう。休みの日なんかには、羽田からふらつと飛行機に乗って、こういう知らない町に来て、帰る。ただ、それだけなんだけどもね」

男の話聞きながら、二年ほど前に完成した地元の空港の様子を思い描いた。まだ利用したことはなかったが、一度だけ友人たちと見学に行ったことがある。

「知らない町に来て、それですぐに帰るだけなんですか？」

「そう、それだけ。……ただ、たまに時間があると、こうやって適当に電車に乗って足を伸ばすこともあるけど、それにしても、時間がくれば空港へ戻って、そのまま東京へ帰るだけ」

男の口調は、その行為を自慢している風でもなく、照れている風でもない。

「でも、なんでこんな所で降りたんですか？　こんな駅、別に何も無いのに……」

「電車の中から、<sup>(6)</sup>ケイリュウが見えたんだよ。それでちょっと降りてみようと思ったんだけど、結局、降りていけなくて……」

「ああ、川だったら、いったん向こうの橋を渡って戻れば、そのまま降りられたのに」

「そうなんだ？　でも、橋って線路しかないだろ？」

「その橋じゃなくて、もう一つ向こうの」

<sup>(7)</sup>男がちらつと腕時計を見たので、会話を遮られたような気がして、それ以上は何も訊けなかった。男はまたストロブの炎を見つめた。そして僕は炎を見つめる男を、ちらちらと盗み見していた。

国内とはいえ、飛行機のチケット代がそう安いとも思えない。しかし、この男は休日にふらつと何の目的も持たず、飛行機に乗れるのだ。そんな話を聞いたせいか、男のコートや革靴や腕時計が急に高価なものに見えてくる。

男のコートや革靴や腕時計を通して、東京を見ているようだった。テレビや映画に出てくるような華やかな生活を、その男を通して見ていた。

「……金持ちなんですね？」

年齢が離れているせいもあって、自分でも不思議なくらい自然に訊けた。

「え？　なんで？」

男が驚いたように訊き返してくる。そこに謙遜する<sup>(8)</sup>ような色はない。なので、逆にこちらが驚いて「だって、ふらつと飛行機に乗るなんて」と言い返すと、「あ、ああ」と頷いた男が「たまにだよ、ほんとにたまに」と、<sup>(9)</sup>今度は照れ臭そうに首をふる。

「……今んとこ、まだ家族もいないし、他に趣味って趣味もないから」

「それにしても……」

「いや、ほんとに」

「あの、どんな仕事されてるんですか？」

目の前の男に、というよりも、目の前の男を通して見える「東京」という町に興味があった。

ここで偶然知り合った男の生活に触れることで、高校卒業後の進路も決まっていな自分にも、何か世界が広がるような期待さえあったのかもしれない。

「仕事？」

男はそう訊き返してきたが、それでもさらっと誰でも知っている有名な自動車社の名前を言った。ちょうどその当時、従兄いとこが欲しがっていたのがこのメーカーの車で、そのせいもあり、たまたま数日前にテレビでやっていたそのメーカーのドキュメント番組のことを覚えていた。

「すごいですね！　すぐでかい会社ですよね」

「そうだね、会社はね」

「この前、テレビでやってたんですよ」

<sup>(10)</sup> コウソウビルのオフィスやヨーロッパ市場拡大作戦のことなど、興奮して喋り出した僕しゅの話を、男は少し居心地悪そうにしながらも黙って聞いていた。<sup>(11)</sup>

ちょうどそのころ、駅員が戻り、「そろそろ、上りが来ますよ」と一言告げて事務室へ入った。しばらくすると遠くで踏切の警報が鳴り、ゆつくりと電車が近づいてきた。

小さな児童公園のベンチに腰かけて、目の前に建つ十階建ての社宅を見上げていると、後輩が唐揚げ弁当を買って帰ってきた。

「すいません。遅くなって、なんかすげえ混んでて」

弁当とお釣りを受け取ると、飲みかけの烏龍茶ウーロンチャを一口飲んだ。

「これ食ったら、西棟のほう回りますか？　先週、ちよつと当たりのいい部屋があったんですよ」

すでにごはんを口に詰め込みながら、後輩が訊いてくる。

「当たりがいいって、どれくらい？」

「いや、まだ奥さんに説明までは出来てないんですけど、子供が出来るんで、そろそろこの辺に一戸建てを買おうって旦那と相談してるって」

「そういうところは口だけだよ。実際、ガキが出来たら金かかるし、狭くても社宅に残ってしばらく様子みるって。それより、この前、太田が当たってた東棟は？」

「あっちは、ほとんどリストラみたいっすよ。自動車業界も今、厳しいんっすねえ。まあ、早期退職の退職金やなんかで、それを機に住宅購入考えてるところもあるみたいっすけど。うちみたいな弱小不動産屋の話を聞いてくれるかどうか……。それに、どっちみち、今から当たったって手柄は全部太田さんチームなんでしょ？」

どこまで買いに行ったのか、口に入れた唐揚げが冷えていた。うまくもない唐揚げにソースをたっぷりかけて口に放り込む。十階建ての社宅の影が、児童公園の半分を覆っている。日を浴びた砂場で、まだ幼い女の子が二人、熱心に砂を集めて遊んでいる。社宅の向こうには巨大な自動車工場がある。

今年一杯でその半分の閉鎖されるらしいが、おそらく一万単位の従業員や家族が、この工場で働き、この社宅に住んでいるのだ。

「昔さ、この会社で働いてる人と、田舎の駅で  
(12) 会ったことがあるんだよ」  
とつぜん口を開いた僕を、箸をくわえたままの後輩が見る。

「この社宅に住んでる人っすか？」

「いや、そこまでは知らないよ。それにもう十五年くらい前の話だし」

後輩が興味なさそうに「へえ」と頷き、またごはんをかき込み始める。

<sup>(13)</sup>「へんなもんだよな。その人がこの社名を口にしたとき、なんていうか、世界を飛び回ってるビジネスマンを勝手に想像した

んだよ。同じ会社でも、社長からライン作業員までいろいろいるのにさ」

独り言だと思っているのか、後輩は返事もしない。

「おい、聞いてんのか？」と肘で突くと、「聞いてますよ。……で、何者なんですか？ その人」と顔<sup>(14)</sup>を歪める。

「何者って……、ただ、駅で偶然会っただけだよ」

「一回だけ？」

「そう一回だけ」

話はそこで終わった。互いに無言で弁当を食<sup>(15)</sup>べ終わり、煙草<sup>タバコ</sup>を吸って、飛び込み営業を再開させることにした。また、開けてもらえないドアのチャイムを押し続ける時間が始まるのだ。

西棟のエレベーターに乗り込もうとすると「あ、そういえば、この前の日曜も飛んだんですってね」と後輩が笑いかけてくる。

「どこ行つたんすか？」

「大分」

「大分？ なんでまた？」

「羽田に着いて、すぐに乗れそうなの選んだら大分だったんだよ」

「それにしてもゴウセイ<sup>(16)</sup>な趣味ですよね」

「そうか？」

「そうですよ」

「なんかさ、ほんとにスツとするんだよ。ストレスが溜<sup>た</sup>まつてるってわけでもないんだけど、空港行って、適当に飛行機乗って、知らない町に行って帰ってくると、なんかがスツとするんだよ」

エレベーターは最上階に向かっている。

(吉田修一「モダンタイムス」『あの空の下で』による)

問1 空欄番号

(1)

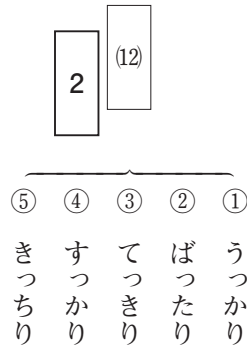
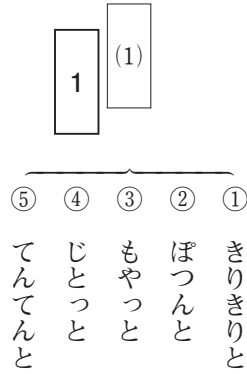
(12)

に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。

1

2



問2

傍線番号(2)「まるで他人の部屋」とあるが、「僕」がそのように感じた理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中

から一つ選びマークしなさい。

3

- ① 待合室に座っていた「男」の高そうな服装と「僕」の格好がまるで釣り合わず、ちぐはぐな感じがしたから
- ② いつも自分だけが使っている待合室を誰か知らない人が我が物顔で使っていたので、緊張してしまったから
- ③ 一目で地元の人ではないことがわかる「男」がいて、その場が彼の空気に満たされていたように感じたから
- ④ うら寂しい山間の待合室を利用するのが久しぶりだったため、使い勝手の悪さのようなものを感じたから
- ⑤ 待合室に座っていた「男」の視線から、「僕」のことを気にも留めない様子が感じられ、居心地が悪かったから



問3 傍線番号(3)・(4)・(6)・(10)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

4  
8

(3) ガマン

4

- ① 植物がハツガする
- ② ユウガな一時を過ごす
- ③ キガに苦しむ
- ④ ムガ夢中で走る
- ⑤ シュクガ式に出席する

(4) チンモク

5

- ① 景気がチンタイする
- ② ウンチンを値上げする
- ③ 山海のチンミを楽しむ
- ④ 暴徒をチンアツする
- ⑤ コレクションをチンレツする

(6) ケイリュウ

6

- ① ケイコクを流れる川
- ② 仲間とレンケイする
- ③ 神のケイジを受ける
- ④ ケイコウ灯を点ける
- ⑤ モケイを組み立てる

(10) コウソウ

7

- ① スイソウを掃除する
- ② 洗濯物をカンソウさせる
- ③ ソウオンに苦しむ
- ④ 年齢カイソウ別の分析
- ⑤ 日本銀行のソウサイが決まる

(16) ゴウセイ

8

- ① 海外にエンセイする
- ② セイダイに歓迎する
- ③ 選手センセイをする
- ④ 物品をセイリする
- ⑤ キセイをそがれる

問4 傍線番号(5)・(8)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマーク

しなさい。

9

10

(5) 首を傾げる

9

① 不思議そうな様子

② 迷惑そうな様子

③ 腹立たしい様子

④ 不快な様子

⑤ 動揺している様子

(8) 謙遜する

10

① 卑屈な態度をとる

② いばり散らす

③ 控えめな態度をとる

④ じつと黙りこむ

⑤ あきれ返る

問5 傍線番号(7)「男がちらつと腕時計を見た」とあるが、「男」の動作を見て「僕」が考えたこととして、最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

11

① 「僕」とは話をしたくないという「男」の強い意思を感じ、おとなしく黙ることにした

② 「僕」の川への行き方の説明が長いことを、「男」からあからさまに非難されたように思った

③ 「男」が時間に追われるビジネスマンだとわかり、「男」への興味が強くなった

④ 「男」には川に降りる時間がないことを悟り、川への行き方の説明を続けることをやめた

⑤ 時間を気にしている「男」に、いつまでも自分につきあわせるのは申し訳ないと思った

問6 傍線番号(9)「今度は照れ臭そうに首をふる」とあるが、「男」が照れ臭そうにしたのはなぜか。その理由として、最も適

切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

12

- ① 「僕」と話すうちに、自分が実際よりも立派な人間であると思われることに気がつき、きまりが悪かったから
- ② 面識もない「僕」に対して、自分の趣味をあげすけに語ってしまったことに気づき、途端に恥ずかしくなったから
- ③ 大した趣味だと思っていなかったのに、「僕」が好意的に受け止めてくれたので、驚いてしまったから
- ④ 「男」がこれまで大切にしてきた趣味に対して、「僕」が賛嘆のまなざしを向けてきたことが嬉しかったから
- ⑤ 「僕」の視線に、華やかな生活を満喫する「男」へのあこがれを感じとり、それが心地よかったから

問7 傍線番号(11)「男は少し居心地悪そうにしながら」とあるが、この時の「男」の様子として、最も適切なものを、次の①～

⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 「男」はドキュメント番組を見ていなかったため、どう反応してよいか困っている
- ② 「僕」の話の内容と、「男」の実際の生活との間にはギャップがあるので、ばつが悪そうにしている
- ③ せっかくの休みに会社の話をあまりしたくなかったため、なんとか話題をそらそうとしている
- ④ 「僕」に華やかな生活を送っていると思い込まれて、ことさら否定できずに面映おもゆく思っている
- ⑤ 興奮して喋る「僕」の話はあまりに田舎じみでいて、そのことを指摘する機会を失っている

問8 傍線番号⑬「へんなもんだよな」とあるが、どうして「僕」はそう思ったのか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 一回だけしか出会っていない「男」に対して、どうしてこれほどまでこだわり続けているのか、その理由がわからずに奇妙に感じているから
- ② 子供の頃には、ふとしたことで世界が広がっていくような感覚を受けたが、いままでは日々の仕事にあくせくしていて、ある種の寂しさを感じているから
- ③ 十五年前、偶然出会っただけの「男」が勤めていた会社の人に、いま営業として関わることになっている、という巡りあわせに不思議な縁を感じているから
- ④ 子供の頃、駅の待合室で出会っただけの「男」に、ただ一方的に有能なビジネスマンというイメージを抱き、他の可能性を考えなかったから
- ⑤ たくさんの従業員を抱えた巨大な自動車工場なのに、今年一杯でその半分近くが閉鎖されるとは、信じられない気がするから

問9 傍線番号14「顔を歪める」とあるが、この時の「後輩」の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中か

ら一つ選びマークしなさい。

15

- ① 自分に興味のない話題に返事を強いられることを苦痛だと感じている
- ② 「僕」の話を無視しようと思っていたのが見すかされて気まずさを感じている
- ③ ヘンな話を突然始め、先輩面で自分を小突く「僕」に怒りを感じている
- ④ 独り言だと思っていたのに、実は自分に話しかけていたことが分かり、戸惑っている
- ⑤ 話を少しも聞いていなかったため、うまい受け答えができずに焦っている

問10 傍線番号15「無言で弁当を食べ」とあるが、このときの「僕」の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中か

ら一つ選びマークしなさい。

16

- ① 生返事ばかりの後輩とはそりが合わず、自分の大切な思い出を話してしまったことを後悔している
- ② 後輩が無口なので心の内が見えず、自分から話しかけることにもためらいを感じている
- ③ 何を話しても興味を示さない後輩にあきれ、自分から口をきこうという気がすっかりなくなっている
- ④ この後の飛び込み営業のつらさを思うと、後輩と会話する元気もなくなつて沈み込んでしまっている
- ⑤ 自分にとっては思い出深い話でも、後輩とは無関係だとわかり寂しさを感じている

問11 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 子供の頃、東京からやってきたという「男」と出会い、その生き方にあこがれた「僕」は、心のどこかでいつか「男」と再会することを願っている
- ② 日頃から、飛び込み営業という厳しい仕事を続けている「僕」には、ささやかな贅沢ぜいたくのために、衝動的に飛行機に飛び乗って見知らぬ町を旅しようとする癖がある
- ③ 子供の頃の「僕」は東京からわけもなく飛行機で来た男にあこがれたが、今では自分も同じようなことをしており、かつて会った「男」の気持ちがわかるようになった
- ④ 不動産の営業職として働くようになった「僕」は、十五年前の小さな駅での出来事を思い出しながら、深く考えずに田舎を飛び出した自分の選択を後悔している
- ⑤ いつしか「男」の行動を自分が模倣していることに気づいた「僕」は、この話を後輩にしながら、自分も誰かに影響を与えるようになりたいと考えている

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

人間は単なる動物ではない。自己保存のために、強ければ弱い者を貪り食うのが当然である、という状態にあるだけの存在者ではない。人類が(1)の状態から次第に(2)という状態へ移行するの(3)に、どれほどの年月とクノウに満ちた経験があつたかは、誰にも分からないだろう。

しかし、とにかく、やがて、人間は、一人一人が絶対の尊厳を持つことを自覚した。すなわち、人間は自由であることを自覚したのである。「自由である」とは、他の誰にも支配されない——それゆえに、他の誰にも貪り食われない——権利をもつ、ということである。言い換えれば、すべての人が自分自身の生を生き、その生き方を自分自身で選択し、決定し、実現する権利をもつ、ということである。

このことは、人間が強いか弱いかに関係ない。<sup>(4)</sup> 伶俐か愚鈍かにも関係ない。すべての人が、自分の存在に至高権をもち、自身の生き方を自分で選ぶ。その点で、すべての人は平等である。それゆえ、われわれは他者の存在を<sup>(5)</sup>シンガイしてはならない。他者を奴隷化してはならない。人殺しをしてはならないのである。

紀元前六世紀頃、古代ギリシアにおいて、人類が明確に<sup>(6)</sup>この自覚に到達したことは驚くべきことであつた。この自覚によって、ギリシア人は、ある特定の人が、あるいは、ある特定の人々が、強いがゆえに、あるいは、賢いがゆえに、あるいは、財力という力の所持のゆえに、常に支配者であることを、不当なことと認識しえたのである。

そうして、かれらは、血まみれの闘争を繰り返しながら、王制を倒し、貴族制を倒し、寡頭制<sup>(注1)</sup>を倒し、僭主制<sup>(注2)</sup>を倒し、遂に紀元前五世紀にアテナイで民主制という社会構造を創り出したのである。民主制とは、一言で言えば、国家を構成するすべての民衆が等しく支配者である、という社会構造のことである。国家をこのような構造のものとして構成しうる民衆を市民と呼ぶのである。

だから、先ず、人間は自由で平等であるためには、市民でなければならぬ。市民とは、自分が属する社会の構造を正しく認識し、また、あるべき社会の構造について理念をもち、その認識と理念にもとづいて社会を運営し変革しうる者のことである。

しかし、すべての市民が同時に支配者であることは構造的に不可能であるから、すべての市民が交代で支配の役職に就きうる構造の社会を創ることによって、人間の平等を実現するのである。すなわち、社会の構造によって定められた法に従って行われる定期的な権力の交代によって、人間の自由と平等を実現するのである。

古代アテナイは、民会、評議会、裁判、経済、財政、軍事、宗教的祭礼、その他にわたり、極めて精緻な役職の構造を作り、それぞれの役職にはそれらに相応しい一定の任期を定め、役職終了後には在任中の行状審査を行った。そして、ある役職には籤引きにより、他の役職には選挙により、役人を選出した。国家の役職に就くということは、その役職に付属した権力をもつということであるが、これらの工夫は、すべて、あらゆる人が権力保有の可能性において平等であることを実現するための工夫であつたのである。

さて、このようにして、氏素性などは言うに及ばず、能力、素質の如何に関わらず、人間の平等を実現するための社会構造は工夫されたが、しかし、この構造が機能するためには、すべての人が法を守らねばならない。人間が自然状態のまままで放置されていたならば、ホップズもカントも言うように、人間は人間にたいして狼狽であり、人間の隣に人間がいる、ということ自体が戦争状態をガインしているのである。だから、戦争をコクフクする基本的前提は、すべての人が法を守る、という約束の遵守以外にはありえない。人間は自由であり、その点で平等である、ということが基本的人權の核であるが、この核の実現は「人間が法を守る」という根源的約束の遵守に一〇〇パーセントイキョしている、と言わねばならないのである。

さて、人間は自分が属する小さな共同体においては、法を守り、平和に生きている。それは家であり、村であり、町であり、県であり、国家である。これらの小規模共同体がそもそも法（慣習）を守ることによって成立したのである。それゆえ、法（慣



習を破る者は直ちに処罰され、共同体からなんらかの仕方除外され、共同体全体の平和が危殆きたいに瀕ひんすることはない。だが、もしも、人々がまったく法を守らず、気ままな暴力によつてのみ自分の主張を通そうとしたならば、そもそも共同体が存在しえず、したがつて、勿論もちろん、国家も存在しえず、ただ武器を振り回す野蛮人の闘争があるだけだろう。プラトンは、盗賊団でさえ仲間うちでは正義がなければ成り立たない、と言っている。

それゆえ、法治が実現しているところには、<sup>13)</sup>最小限の平和がある。現在、地球上には多数の国家が存在しているが、それらのうちで、法治が確固として実現している国は平和であり、安全であり、そこに住む人々は幸せである。

これに対し、未だいま、法秩序が確立せず、人々が暴力（武力）によつて自己主張をぶつけ合っている国では、権力者は暴力（武力）によつて秩序を維持しようとするが、内紛が絶えず、治安が悪く、平和は存在しない。そのような国は、本当は、未だ国家とは言われえないのである。ここから、地球上全体に平和をもたらすにはどうすべきか、という (15) に入る前に、先ず、<sup>16)</sup>考えておかねばならぬことがある。

それは、現在、地球上には様々の異なつた国々がある、という現実である。ある国は非常に富み、ある国は非常に貧しく、ある国は気候温暖で土地肥沃であり、他の国は岩石と砂漠の荒野であり、ある国は豊富な地下資源に恵まれ、他の国は資源ゼロに等しい。

これらの相違は、すでに述べたように、何万何千年にわたり、主として民族移動という名の戦争に次ぐ戦争によつて生じた結果であるが、よい土地を獲得した強い民族の強さは全くの偶然である。すなわち、ある人が男であり、あるいは、女であり、あるいは、ヨーロッパ人であり、あるいは、アジア人であるのが、偶然であるのと、全く同じ意味で、強さも、才能も、全くの偶然である。

それゆえ、体力、知力が優秀であるが故に、あるいは、数が莫大ばばたいであるが故に、現在、恵まれた土地を占拠し、富裕な国家を樹立している民族は、この恵まれた状況がまったく偶然の結果であることを認識しなければならない。まったくの偶然により、

(14)

がみえてくる。だが、

自分たちが体力、知力の弱い人間でもありえたことを、自覚しなければならぬ。ロックは、王権神授説を否定したとき、地球の表面は、もともと、誰の占有物でもない、と言っている。

そうであれば、現在、豊かな富を享受している国の人々は、その大きな富を、貧困に喘ぐ国の人々に、できれば無償で提供しなければならぬだろう。なぜなら、すべては偶然の結果だからであり、したがって、立場が逆でもありえたからである。

(岩田靖夫『ギリシア哲学入門』による)

(注1) 寡頭制——国家を少数の人間が支配する政治体制

(注2) 僭主制——民衆の支持を利用して、非合法に政権を握った独裁者による政治体制

問1 空欄番号

(1)

に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

18

- ① 孤軍奮闘
- ② 弱肉強食
- ③ 群雄割拠
- ④ 有象無象
- ⑤ 独立独歩

問2 空欄番号

(2)

に入る表現として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

19

- ① 支配の構造化
- ② 権力の保有
- ③ 富の占有
- ④ 差異の認識
- ⑤ 他者との共存

問3 傍線番号(3)・(5)・(9)・(11)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

20  
24

(3)

クノウ

20

- ① ユイノウの日取りを決める  
 ② 検査でノウハを測る  
 ③ ボンノウを捨てる  
 ④ ラクノウを営む  
 ⑤ ノウムが立ちこめる

(5)

シンガイ

21

- ① 家屋がシンスイする  
 ② シンシ服をあつらえる  
 ③ キンシンを命じられる  
 ④ 海岸のシンシヨク  
 ⑤ シンシツに閉じこめる

(9)

ガンイ

22

- ① 鉄分のガンユウ量  
 ② ガンキョウに拒む  
 ③ 自らシガンする  
 ④ 論文のシユガン点  
 ⑤ 瀬戸内海エンガン

(10)

コクフク

23

- ① 不正をコクハツする  
 ② コクメイに記録する  
 ③ 太陽のコクテン  
 ④ ザンコクな事件がおきる  
 ⑤ コクソウ地帯を訪れる

(11)

イキヨ

24

- ① 国のイシンをかける  
 ② 学級イインを務める  
 ③ イロウ会を開く  
 ④ ヘイイな言葉で話す  
 ⑤ イガン退職をする

問4 傍線番号(4)・(8)・(12)・(17)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選

びマークしなさい。

25

28

(4) 伶俐

25

- ① 勤が良くはたらくこと
- ② 気分が落ち着いていること
- ③ 頭の働きが鋭いこと
- ④ 意識が冴さえていること
- ⑤ 反応が冷ややかなこと

(8) 精緻

26

- ① とても正確なこと
- ② 大雑把なこと
- ③ こみいつていること
- ④ 丁寧なこと
- ⑤ くわしく細かいこと

(12) 瀕する

27

- ① 直面する
- ② 衰える
- ③ 頻発する
- ④ 巻き込まれる
- ⑤ 状態を維持する

(17) 享受している

28

- ① 先祖代々受け継いでいる
- ② 受け取って自分のものにしていく
- ③ 十分に分け与えられている
- ④ 与えられたものを貯め込んでいる
- ⑤ 手にするのが当然だと考えている

問5 傍線番号(6)「この自覚に到達した」とあるが、その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

29

- ① 人類は自己保存のためだけに生存するのではないと考える宗教的な自覚
- ② 人としての差異を認めることで、それぞれの立場に相応しい権利を行使できるという自覚
- ③ 弱者・強者問わず、年長者に従う限りは、一人一人がかけがえない存在でいられるという自覚
- ④ 人間は一人一人が絶対の尊厳を持ち、誰にも支配されない存在であるという自覚
- ⑤ 人間は「自由である」ことの代償として、自分で選択した生き方に対する責任を負うという自覚

問6 傍線番号(7)「あるべき社会」とはどのようなものか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

30

- ① 能力の高い人が支配者になれる社会
- ② 各人が平等に支配に関わるような社会
- ③ 自由と豊かさをめざす社会
- ④ すべての市民に責任と義務が課せられる社会
- ⑤ できるだけ公平に役人を選出して運営する社会

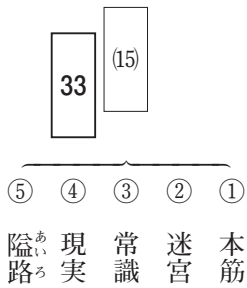
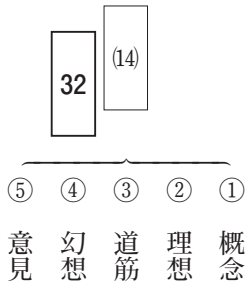
問7 傍線番号13「最小限の平和」とは何か。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

い。

- ① プラトンが挙げた例のように、仲間内の正義によって集団が成り立っているような状態
- ② 人々が法を守ることで、それを最低限の成立条件とする共同体を維持している状態
- ③ 地球上に存在する多数の国家のように、権力者のもとに団結し、治安の維持をはかっている状態
- ④ 法を破る者を暴力で排除することで、共同体の最低限の安全が守られている状態
- ⑤ 不当な支配に対しても、血まみれの闘争を繰り返さないように、市民が団結している状態

問8 空欄番号  ・  に入る語句として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。  ・



問9 傍線番号16「考えておかねばならぬことがある」とあるが、どのようなことを「考えておかねばならぬ」と言っているの

か。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 豊富な資源をもつ国と不毛な砂漠の国における貧富の差は、もともと偶然によるものにすぎないということ
- ② よい土地を獲得し繁栄することができた民族は、いつその幸運を失うことになるかわからないということ
- ③ 肥沃な土地をめぐる競争が行われた結果、その実力に応じて地球上には裕福な国と貧しい国が生まれたということ
- ④ 恵まれた肉体で優位に立つことができた種族は、領土をめぐる争いでも優位にたつことができたということ
- ⑤ 地球の表面に国境線はなく、誰のものでもないため、本来は国という概念自体が空虚なものであるということ

問10 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① 共同体を維持していくためには、「法を守る」ことが最低限の条件となるが、実際は不可能なので、戦争が起こる
- ② 人間はもともと他者との共存が可能な生物なので、他の動物と違って誰かから貪り食われることがない
- ③ 人間が自由で平等であるためには、古代アテナイのように奴隷でも支配者となれるような共同体が必要である
- ④ 自然状態の人間は、他者の自由を奪おうとする狼であり、権力者は暴力によって秩序を維持するしかない
- ⑤ 人間の平等の実現のためには、法の遵守が必要だけでなく、豊かな国が貧しい国に富を移転させなければならない



第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(20点)

いつ比くらの事にか、徳大寺のおとど熊野(注1)(注2)へまゐり給ひける。讃岐国(注3)しり給ひける比くらなりければ、かれより人夫おほくめしのぼせて侍りけるが、おほくあまりたりければ、少々返し下されける中に、或る人夫一人しき頻りに歎き申しけるは、「たかききみの御徳(2)によりて、幸ひに熊野の御山をがみたてまつらんことを悦よろこび思ひつるに、あまされまゐらせて帰り下らん事かなしきことなり。ただまげてめしぐせさせ給へ」と奉行の人にいひければ、「さりとはあまりたれば、さのみは何の用にせんぞ」といひければ、なくなくうれへて、「ただ御功德(注4)に食たばかりを申しあたへたまへ。」いかに宮つかひは仕うまつり候ふべし」と、ねんごろに申しければ、哀あはみて具せられけり。げにもかひがひしく、宿々にては人もおきてねども、諸人がこりの水をひとり(注5)と汲みければ、こりさほと名付けて、人々もあはれみけり。さて、おとどまゐりつき給ひて、奉幣(注6)はてて、證誠殿(注7)の御まへに通夜して、参詣(注8)の事随喜(注9)のあまりに、大臣の身に藁わら沓くつはばきを(注10)着して、長途(注11)を歩きまゐりたる、ありがたき事也(注12)と、心中に思はれて、ちとまどろまれたる夢に、御殿より高僧出で給ひて仰せられけるは、「大臣の身にて、わら沓はばきしてまゐる、ありがたき事に思はるる事、此(注13)の山のならひは院・宮みなこの礼なり。あながちに独り思はるべきことかは。こりさほのみぞいとほしき」とおほせらるると見給ひて、さめにけり。驚き恐れて、そのさほのことを尋ねらるるに、しかじかとはじめよりの次第申しければ、あはれみ給ひて、国に屋敷など永代限りて宛て給ひけり。いやしき下臈(注14)なれども、心をいたせば、神明あはれみ給ふ事かくのごとし。

〔古今著聞集〕による

(注1) 徳大寺のおとど——藤原実能

(注2) 熊野——熊野神社

(注3) 讃岐国——香川県の旧国名

(注4) 御功德——よい報いを与えられるような善行

(注5) こりの水——垢離(注6)の水。神仏に祈るときに冷水を浴びて心身を清めること

(注6) 随喜——心からありがたく思うこと

(注7) 藁沓はばき——わらじや脚絆きよはん

問1 傍線番号(1)・(6)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

(1) しり給ひける

36

36

37

① 治めていらつしやつた

② わきまえていらつしやつた

③ 理解していらつしやつた

④ 認識していらつしやつた

⑤ 気にかけていらつしやつた

(6) ねんごろに申しければ

37

① 丁寧に申し出たところ

② 親切に申し出たので

③ 親しげに申し上げたので

④ 一生懸命に申し上げたので

⑤ なれなれしく申し上げると

問2 傍線番号(2)「たかききみ」とは、誰のことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

- ① 徳大寺のおとど
- ② 奉行の人
- ③ こりさほ
- ④ 高僧
- ⑤ 神明

38

問3 傍線番号(3)・(5)はどういうことを表しているのか。その説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれ

ぞれ一つずつ選びマークしなさい。

39

40

(3) ただまげてめしぐさせ給へ

39

- ① 人夫たちに十分な食事を与えること
  - ② 信念をまげて新たに仲間に入れること
  - ③ 余剰な蓄えを人夫たちに分け与えること
  - ④ 道の変更に熊野へ向かうこと
  - ⑤ 余分な人間として帰らせずに連れて行くこと
- (5) いかにも宮づかひは仕うまつり候ふべし
- 40
- ① その人夫が、どんな手段を使っても宮仕えを続けるということ
  - ② その人夫が、どのような仕事でもするということ
  - ③ その人夫が、他の宮仕えの人と同じように働くということ
  - ④ 奉行が、どのような手段を使っても宮仕えを続けるということ
  - ⑤ 奉行が、どのような仕事でもするということ

問4 傍線番号(4)・(7)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

い。  
41

42

(4) あまりたれば

41

- ① ラ行四段活用動詞の連用形＋過去の助動詞＋接続助詞
- ② ラ行四段活用動詞の連用形＋存続の助動詞＋接続助詞
- ③ ラ行四段活用動詞の連用形＋完了の助動詞＋終助詞
- ④ 名詞＋完了の助動詞＋終助詞
- ⑤ 名詞＋存続の助動詞＋接続助詞

(7) 歩きまゐりたる

42

- ① カ行四段活用動詞の連用形＋尊敬の動詞＋完了の助動詞
- ② カ行四段活用動詞の連用形＋謙讓の動詞＋存続の助動詞
- ③ カ行四段活用動詞の連用形＋謙讓の動詞＋完了の助動詞
- ④ 名詞＋尊敬の動詞＋完了の助動詞
- ⑤ 名詞＋謙讓の動詞＋存続の助動詞

問5 傍線番号(8)「此の山のならひ」の指す内容として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

- ① どのような高い身分の者でも、長い道のりを歩いて参詣すること
- ② どのような高い身分の者でも、清めの水を浴びなければならぬこと
- ③ どのような高い身分の者でも、わらじに脚絆で参詣すること
- ④ どのような身分の者でも、一晚を本宮で過ごさなければならぬこと
- ⑤ どのような身分の者でも、参詣することが可能だということ

43

問6 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① 徳大寺のおとどは熊野から数多くの人夫を連れて行った
- ② 奉行はこりさほを哀れに思つて、国に返すことにした
- ③ こりさほは大臣から、子孫の代まで屋敷などを与えられた
- ④ 身分の低い者は誰でも、神仏の加護を受けることができた
- ⑤ こりさほは、御殿から高僧がでてくる夢を見た

問7 本文の出典である『古今著聞集』と同時期に成立した作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 大和物語
- ② 大鏡
- ③ 日本霊異記
- ④ 宇治拾遺物語
- ⑤ 今昔物語集